

家形埴輪 土辺古墳出土

一個 (考古資料・指定)

附 円筒形埴輪残欠

一括

京都市上京区下立売通新町西入薮ノ内町
京都府 (京都府立山城郷土資料館保管)

総 高 (推定) 一〇一センチメートル
時 代 古墳時代

屋蓋部、本体部及び基底部から構成され、高床式入母屋造の型式に属する。屋蓋部は切妻造の上屋根と寄棟造の下屋根からなる。上屋根は最大で平側長八〇センチメートル、妻側長二四・五センチメートル、高一四センチメートルを測る。上半部は全体に線刻で網代を表現し、妻側両端に破風板を表現する。平側下部にはおよそ方二センチメートルの梯子状の面違文様帯を削り出して表現する。妻飾りは両面ともに下屋根から粘土板を垂直に立ち上げて棟束を表現し、その両側は開放する。下屋根は平側長八四センチメートル、妻側長六三センチメートル、高一七・五センチメートルを測る。四隅に降棟を表し、上部及び下部に上屋根同様の面違文様帯をめぐらせる。文様帯は各方向中央部に設けられた区画線を中心として左右対称に削り出される。軒先から内側四・五センチメートルの位置から粘土板を下垂させて幕板を表現する。幕板上にも同様の面違文様を表す。

本体部は上層 (床上) 部と下層 (床下) 部からなる。上層部は桁行二間、梁間二間で、平側約六〇センチメートル、妻側約四三センチメートル、高約三五センチメートルを測る。角形に表された柱の間に腰壁を設け、腰壁上縁には線刻で窓枠を表現する。

上層部と下層部との境の外側には、幅五センチメートル前後の突帯を四周させ、突帯先端近くから斜め下方に幅約五センチメートルの突帯をつくり、その表面には屋根同様の面違文様を表す。また、同境内側にも幅約三・五センチメー

トルの突帯を四周させ、屋内の床を表す。

上層部外側の四隅及び各面中央の八方向において、前記突帯上面と軒先との間を斜方向に板状の粘土板 (縦約四センチメートル、横約一・五センチメートル、長約二七センチメートル) で結合する。これは深い軒及び幕板を支える頬杖を表していると考えられる。頬杖の造形は写実的であり、その下端は上層部角柱下端と突帯にほぞ差しとし、上端は軒先の鼻母屋を受けるとともに幕板をほぞ差しで渡し架けた建物の存在を想定することができる。

下層部、基底部は遺存状況が悪い。またまっつて位置を確定することができた箇所は、妻側柱一本分と半円形透かし部一箇所にとどまったため、構造の詳細については不明確な部分を残している。下層部は桁行二間、梁間一間である。柱は上層部と連続して角形に表され、最大残存長は約一八センチメートルを測る。基底部の半円形透かし部は直径約四センチメートルを測り、各面中央に同様の透かしが設けていたと考えられる。また、底面から五・六センチメートルの高さに裾廻しの突帯が剝離した痕跡が残る。

本家形埴輪には、全体に赤色彩色の跡がみられる。特に上屋根部妻側内面、下段部柱に多く観察できる。このほか面違文様や壁表現の線刻中にも確認することができ、もとは全面に彩色されていたと考えられる。

土辺古墳は乙訓郡大山崎町字下植野小字土辺に所在し、京都盆地西南部を南流する桂川西岸の標高約九メートルの河岸段丘上に位置する。古墳は平成十四年度に発掘調査され、一辺二三メートルを測る小規模な方墳であることが判明した。埋葬施設は後世の削平により検出できなかったが、上面幅約三メートル、深さ約〇・六メートルを測る周溝を検出し、北側周溝内から家形埴輪一基分、また東側及び西側周溝から円筒形埴輪片等が出土した。築造時期は、円筒形埴輪片の特徴から四世紀後半と考えられる。

家形埴輪は、屋根を下にした状態で出土したことから、屋蓋部及び本体上層部の遺存状態が比較的良好で、本体下層部及び基底部は一部分が遺存するに過ぎない。

本埴輪は、高床式入母屋造で、開口部が広く取られている点、全体に赤色彩



色が見られる点から祭殿を表現したものと考えられる。

造形の特徴としては、推定総高が約一メートルと比較的大型である点、幕板、
頬杖の構造表現や随所に刻される面違文様など写實的、立体的な表現が多用さ
れる点を挙げることができる。幕板は、本埴輪と構造形式が類似する奈良県宮
山一号墳出土の家形埴輪（四世紀後半）などに類例がみられる。一方、頬杖は
家形埴輪には類例がなく、中国や東南アジアの現存建物にみられるのみであり、
家形埴輪の源流や日本の古代建築を考えるうえで重要である。埴輪の制作年代

は、その写實的な造形から古墳築造期と同様に四世紀後半と考えられる。なお、
同時に周溝から出土した円筒形埴輪の残欠がコンテナ五箱分存する。これらは、
円筒形埴輪の鱗の部分や朝顔形埴輪の一部を含み、古墳築造年代を知るうえ
で不可欠の資料であるため、附として一括保存を図ることとする。

以上のように、本家形埴輪は古墳時代前期に遡る装飾性豊かな大型の家形埴
輪として稀少な例であり、類例のない頬杖をもつ構造は注目され、埴輪研究上
や建築史研究上に貴重である。

（地主 智彦）

内 訳

(第一埋葬)

一、仿製鏡残欠 一面分

一、玉類

瑪瑙勾玉 二個

溶結凝灰岩管玉 残欠共 四個

綠色凝灰岩管玉 残欠共 四個

水晶甕玉 一個

水晶小玉 十六個

ガラス小玉 二十六個

一、甲冑類

鉄衝角付冑(三尾鉄付) 一頭

鉄短甲 一領

鉄頸甲 一領

鉄肩甲 一組

革草摺残欠 一括

一、鉄劍 二口

一、鉄鏃 残欠共 三十八本

一、鉄地金銅張胡籙金具 一組分

一、豎櫛残欠 十一個

(第二埋葬)

一、揆文鏡 一面

一、玉類

瑪瑙勾玉 一個

溶結凝灰岩勾玉 三個

綠色凝灰岩勾玉 三個

溶結凝灰岩管玉 一個

綠色凝灰岩管玉残欠共三十八個

ガラス小玉 残欠共 七個

滑石白玉 百六十五個

一、甲冑類

鉄衝角付冑(綴付) 一頭

鉄短甲 一領

一、鉄刀 三口

一、鉄刀子 四本

一、鉄鏃 残欠共 七十三本

一、農工具類

鉄斧 七本

鉄鎌 五個

鉄手鎌 五個

鉄鋏 四個

鉄鉈 二本

鉄鑿 二本

鉄刀子 七本

一、豎櫛残欠 九個

(第三埋葬)

一、溶結凝灰岩勾玉 一個

一、鞘口金具 一個

一、鉄鏃 残欠共 四十二本

一、農工具類

鉄斧 一本

鉄鎌 二本

鉄鋏 二本

鉄鉈 一本

鉄刀子 一本

(墳丘)

一、円筒形埴輪 二個

一、埴輪 残欠共 一括

一、土器 残欠共 一括

時代 古墳時代

私市円山古墳は綾部市私市町円山に所在し、府北部最大の河川である由良川中流域に広がる東西約一八キロメートル、南北約二キロメートルの細長い沖積平野の中央部に位置する。古墳は西流する由良川北岸に広がる山塊最南端の丘陵頂部にあり、墳頂部の標高は約九四メートルで平野部との比高約七〇メートルを測ることから、墳頂部からは広く平野部全体を見渡すことができる。昭和六十二・六十三年度に発掘調査が行われ、古墳の全容が明らかになるとともに数多くの遺物が出土した。

古墳は、東南方向に造り出しを有する府内最大の円墳で、円丘部の直径七一メートル、造り出し部の長さ一〇メートル、幅一八メートルを測る（国史跡、平成六年三月二十三日指定）。墳丘は、二か所に平坦部をもつ三段築成になるもので、下段の斜面を除く上・中段の斜面と造り出し部の斜面に葺石が施され、円丘部の二か所の平坦面と造り出し部には円筒形埴輪の列が廻っていた。

墳頂部は、東西約一七メートル、南北約一八メートルの円形の平坦面を形成し、三基の埋葬施設が検出され、確認順に第一、第二、第三と名付けられた。

墳頂部のほぼ中央に東西方向に主軸をとる第二埋葬（全長四メートル、幅〇・六メートル）、その南東側には南北方向に主軸をとる第三埋葬（全長二・四メートル、幅一メートル）が位置する。また、第一埋葬（全長三・八メートル、幅〇・六メートル）は、第二埋葬の築造後にその北側に平行して築造されたと考えられる。第一、第二埋葬は、ともに二段墓壇内に組合式木棺を直葬し粘土で被覆する構造であったが、第三埋葬は小規模な隅丸長方形の墓壇を有し、棺の痕跡は確認できなかった。

出土品には、三基の埋葬施設から未盗掘の状態出土した各種副葬品並びに墳頂部及び墳丘裾部から出土した埴輪、土器がある。

第一埋葬並びに第二埋葬からは、共に小型仿製鏡、玉類、甲冑類、武器類、堅櫛が出土し、加えて第一埋葬からは胡籙金具、第二埋葬からは刀子及び農工具類が出土した。このうち、甲冑類は第一埋葬から鉄衝角付冑、鉄短甲、鉄頸甲及び鉄冑甲が、第二埋葬から鉄衝角付冑及び鉄短甲が良好な保存状態で出土し、武器研究上に資料価値が高い。各々に鉄衝角付冑一頭と三角板革織式短甲

一領が副葬されていた点は、ニゴレ古墳（京丹後市弥栄町）や聖塚古墳（綾部市）と共通するが、京都府北部において甲冑を保有する古墳はわずかに数例にとどまることから、被葬者の性格を窺ううえでも注目される。また、鉄地金銅張胡籙金具は、鉸具、中円板状金具及びコ字形金具から構成される三連式吊手飾金具で、波状列点文が蹴り彫りされる装飾性の高いもので、類例少ない同金具の初期の遺例として貴重である。

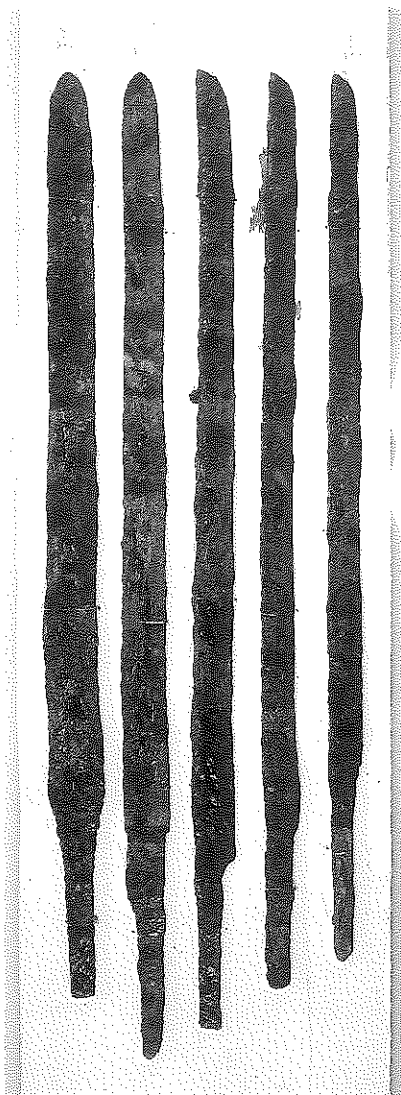
両埋葬施設の築造順は、埋葬施設の位置関係や第一埋葬の鉄鍬にやや新しい様相が認められることから、第一埋葬が後出すると考えられる。

一方、第三埋葬からの出土品は鉄鍬及び農工具類が中心で、第一、第二埋葬と様相を変えるが、その形状は第二埋葬のものと類似することから、時期的にも近似するものと推定される。

本古墳の築造年代については、円筒形埴輪の型式が五世紀後半に編年される点や、第一、第二の両埋葬ともに長頸鍬及び曲刃鍬をもたない点、第一埋葬が鉄地金銅張胡籙金具を持つ点などを勘案すると、五世紀第三四半世紀に古墳が築造され、各埋葬に前後関係は認められるものの、同期の中で全ての埋葬が行われたものと考えられる。

以上のとおり、本出土品は質量共に豊富な一括遺物群であり、古墳時代中期の丹波地域における首長の性格を解明するうえで、欠くことのできない重要な資料である。

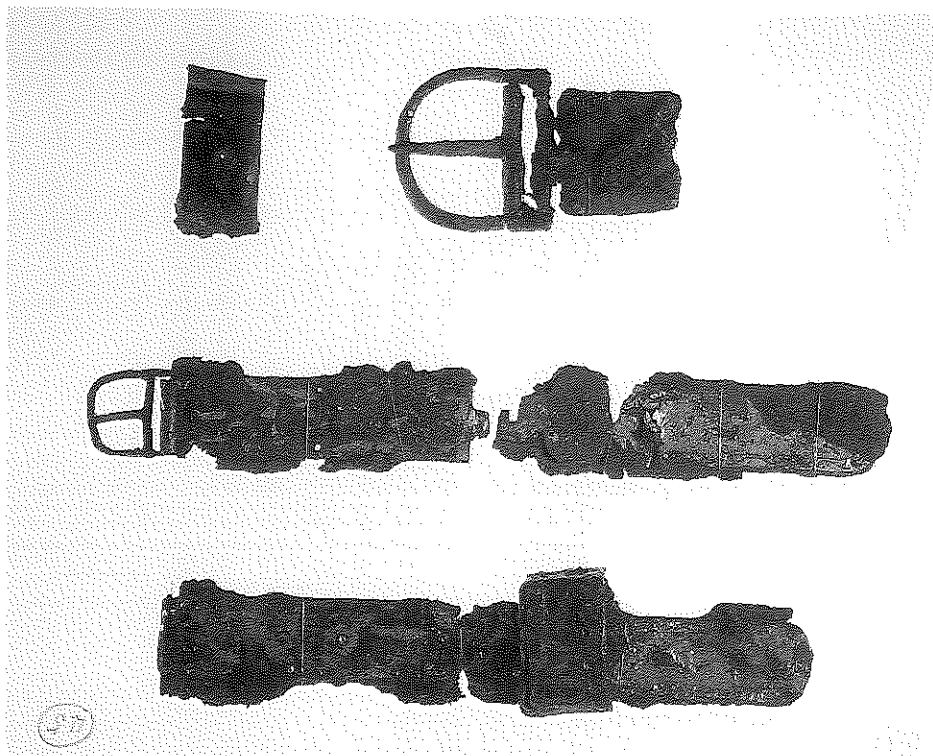
（地主 智彦）



鉄劍 2 口 (左)、鉄刀 3 口 (右)



鉄衝角付冑 1 頭、鉄短甲 1 領、鉄頸甲 1 領、鉄肩甲 1 組、革草摺殘欠 一括



鉄地金銅張胡籙金具 1 組